

## あの子と僕の「幸せ」

仙台コミュニケーションアート専門学校  
クリエイティブコミュニケーション科  
ライトノベル・小説作家専攻  
一年  
後藤 北斗

「ガラクタ」。価値を見いだせなくなった「モノ」を人はそう呼ぶ。座れない椅子、掛けないペン、割れたお皿。それが出来なくなってしまった時、「モノ」は「ガラクタ」へとなり下がる。でも、それは逆に言えば使える間は価値があるということ。それでも、中には例外も存在する。それが「おもちゃ」だ。「おもちゃ」は使えるか使えないかを自分たちで決めることが許されていない。それが新品でもお古でも、使えるかどうかを決めるのは使う人の方だから。人の成長と共に切り捨てられるかもしれない、「おもちゃ」は生まれた時からずっと本能的にそんな恐怖を抱えている。「おもちゃ」は普通の「モノ」とは違う。いつ捨てられてもおかしくない。「使えない」から捨てられるより、「使わない」から捨てられることの方が「モノ」にとってどれだけ残酷なことなのか、きっと人には理解出来ないだろう。人の言葉で「幸せ」という言葉がある。曖昧だけど誰もが欲するもの。

人も「モノ」もそれは例外じゃない。でも、それなら「おもちゃ」の幸せとは何だろう。どの様な末路を辿るのが、「おもちゃ」の幸せなのか。そんな事を求めた僕の話、どうか記憶の片隅にでも留めてほしい。

これが僕の幸せの物語。

僕は目を覚ました。上を見上げると綺麗な満月が僕を見下ろしていた。周りの黒く四角い空間の中で、その満月だけが僕をやさしく包んでくれているような気がした。僕は立ち上がり、周りを囲む壁の縁に手をかけた。木で出来た右腕が軋んだけど、気にせず力を込め、勢いよく外に飛び出した。ゆっくりと振り返ると月に照らされたダンボールが僕を見据えるように居座っていた。胸がチクリと痛む。この痛みは何だろう…。そう思っても誰も教えてはくれない。教えてくれる人はもう僕にはいない。

そこで初めて僕は自分の周りを覆う何とも歪な世界に目を向けた。

そこにはいくつもの巨大な「山」がそびえ立っていた。一つ二つじゃない。見渡す限りの風景が全てその黒い「山」で埋め尽くされていた。あまりにも異質な光景なのにも関わらず、不思議と僕の中に恐怖はなかった。僕は目の前に立っている「山」の一つにゆっくりと近寄ってみた。よく見てみると、山の表面はデコボコしていて、様々な形の何

かが飛び出していた。その山の数歩先まで近付くと、その山が全て「モノ」で出来ていることが分かった。木、紙、鉄。あらゆる「モノ」が重なって出来ていた。僕の拙い記憶でも分かる椅子、時計、お皿。その全ての共通点は壊れていること、つまり「ガラクタ」だということだ。また胸がチクリと痛む。つまり、この山たちは全て「ガラクタ」。そして今ここに立っている僕も…。

もう一度、さっきより少し胸の痛みが走った時、後ろから土を踏み分ける小さな足音が響いた。振り向くと、そこには少し動くたびにキシキシと音を立てるブリキの人形がどこか物寂しく立っていた。

「お前さん…ここにやってきたばかりじゃな？」

僕は恐る恐る口を開いた。

「そうか…。やはりな。ここに来たばかりのおもちゃ達は大概今のお前さんと同じような顔をしとる」

「顔…？」

「そうじゃ。何が起こったのかよく分からない反面、心のどこかではどうしてこうなってしまったのかを理解してしまっている…。そんな矛盾が共存した虚ろで生気のない顔」ブリキの人形が言っている言葉には意味の分からないものもあったけれど、何となく言おうとしている事は理解できた。それは今のこの現実をいい意味で後押しして認識させてくれているようでもあった。

「僕は捨てられた…んだね…」

「そういうことになるな…」

急に確信を突く言い方になったブリキの人形に少し腹が立たないでもなかったけど、本当の事だから何も言えなかった。

「ここはどこなの？」

「ここは廃棄物置き場。ガラクタになったモノ達が来る所じゃ」

…胸が痛む。

「やっぱりそうなんだね…」

「お前さんが捨てられたのはその左腕が原因か？」

ブリキの人形は僕の左腕があった場所を指差して言った。

「違うよ…。たぶんそっちの方がまだ分かりやすくて良かったかもしれないけど」

「そうか…」

ブリキの人形は気を使ったのかそれ以上は左腕について訊いては来なかった。

そう…。左腕を失ったから捨てられた。そうだった方がきっとどんなに胸が痛くても納得だけはできたと思う。壊れた自分が僕自身のせいにしてしまうことも、あの子のことをきっぱり忘れる事だって出来た筈だ。それが出来ないのは分からないから。左腕が無くなってもどんなにボロボロになっても大切にしてくれたあの子がどうして僕を捨てたのか。自分勝手だとも思う。それでも、あの子と過ごす時間が大好きだった。「幸せ」

だったんだ。

でも、僕の幸せそのものだったあの子に捨てられたことで僕の幸せは途切れてしまった。

そして、その幸せが僕の中を埋めていてくれた部分が大きすぎて、「幸せ」を忘れられないでいる。未だに求め続けている。

「ここには僕の中を埋めてくれる幸せは無いのかな？」

「さあなあ…。お前さんの求める幸せなど、所詮他人でしかないわしには理解してやることは出来んからな…」

何となく呟いただけの僕の言葉にもブリキの人形は顔色一つ変えず答えた。

「ただ…忘れる事が出来ないのなら探すしかないのではないかな？」

「探す…？」

「そうじゃ…。忘れられない記憶があることだけでも幸運だと思うべきじゃ。何よりお前さんはまだ若い西洋人形じゃしのう」

西洋人形である事がどういう意味を成すのかよく分からなかったけど、そう言って初めて緩んだブリキの人形の表情はとても穏やかだった。

「でも…探すってどうやって？」

「言ったじゃろう…。わしは所詮他人じゃ。お前さんの言う幸せがどんなものか理解することなど出来んし、ましてやそれを見つける方法など知る由もない。ただ、忘れられない…忘れたくないものがあるなら、その感覚が残っているうちに少しでも抵抗するべきじゃ…」

「ブリキのおじいさんにはそういうものは無いの？」

そう言うと、ブリキの人形は少し悲しそうな顔をして言った。

「わしにも昔持ち主がいた。十年前の事じゃがな…。きっとその時のわしは今のお前さんの様に忘れたくない幸せがあったのだと思う」

「…思う？」

わしもここに来たばかりの頃は、捨てられたという事実が認められず葛藤を繰り返していたのだと思う。しかし、ここで長い年月を過ごすうちに持ち主と持ち主といた頃のような幸せでしか埋められないと思っていた部分が妙に冷たい何かで無理矢理埋められていくような感覚に襲われた。終いには何故そこまでして幸せを求めていたのか…そもそも持ち主と過ごした時間が本当に幸せだったのかも思い出せなくなってしまった」

「僕…そんなの嫌だよ…」

ブリキの人形の悲しそう顔と幸せを忘れてしまうという言葉が突き付けられたその結果、僕の口から出たのはそんな言葉だった。

「そう…誰だって嫌じゃ。幸せを覚えているうちに…」

ブリキの人形は今まで俯き気味だった顔を僕に真っ直ぐ向けて言った。

「お前さんのやり方でお前さんの幸せを見つけなさい…。見つかる、という保証だけは出来んがな…」

「分かった…」

僕は早々にブリキの人形に背を向けた。僕のために彼が言葉をかけていることは分かっている。でも、何となくこれ以上彼の話を聞くことも顔を見ることも怖くなった。このままここに彼と居続ければ彼と同じになってしまいそうで怖かったから。それでも僕はもう一つだけ彼に訊きたいことがあった。僕は彼に背を向けたまま訊ねた。

「おじいさん…名前を…訊いてもいいかな」

「わしの名前？」

「うん…」

「わしみたいにはなりたくないじゃろ？わしの名前など聞かない方がいいのではないかな？」

僕の気持ちに気付いて言っているのだろうか…。それとも適当に言っているのか…。どっちでも知ったことではないけれど。

「名前があることって意外に大きな幸せなんだ。だから、おじいさんも自分の名前を口に出せば少しは空っぽじゃなくなるかなって思ったんだ…」

「お前さん…優しいな。じゃあ、お前さんが幸せを見つけられたらわしにも少し分けてもらおうかの…」

僕は首を縦に振った。

「わしの名前はフラヌスじゃ」

「フラヌス…」

「それじゃあ、わしも訊いていいかの？」

「うん…」

「お前さんの名前は？」

「僕の名前は…」

満天の夜空、ガラクタの山々、僕とフラヌス。

全てを包むようでも、突き放すようでもある冷たい風が横切っていった。

初めて会ったのは埃だらけの古いおもちゃ屋だった。そこは店の主人のこだわりで、木製のおもちゃがたくさん並んでいて、僕もそんな中の一つだった。僕は店内の隅にひっそりと置かれていたから、外の景色がほとんど見えなかった。薄暗い店内に差し込む窓からの光が何故かとても眩しく見えて、僕はいつしか外の世界に惹かれていった。たまに店を訪れるお客の服や、身に付けているもの一つとっても僕にとってはとてつもなく魅力的だった。でも、しばらくするとそれだけでは物足りなくなっていく、結局それらも埃が舞う日常の風景と何ら変わらなくなっていった。

そんなある日、勢いよく店に飛び込んできた一人の少女がいた。薄いピンク色のドレ

スのような服を着ていて、一目でいつも来るお客さんとは違うと分かった。久し振りに興味がわいてきた僕はその少女をまじまじと観察した。さらさらと流れる長い髪は金色、ビー玉の様に透き通った目は綺麗な青色だった。白い小さなバックを肩からかけていて、服と同じ薄いピンク色の靴を履いていた。少女は木のおもちゃ達が珍しいのか、その顔には無邪気な笑みが浮かんでいた。それは偽りのない心からの笑顔だと思わざるを得ないほどにキラキラと輝いて見えた。まるで、僕が憧れ続けた外の世界の光と同じようだと思った。

ふと、少女はこちらにその綺麗な青い目をこちらに向けた。僕は驚いた。少女がこちらに向かって凄い勢いで走り寄ってきたからだ。

少女は僕の前にやってくると弾けるような笑顔を見せ、僕を胸に抱き店主が座るカウンターに駆け出した。

「この子ください！」

少女は元気よくそう言った。僕は何も考えられないでいた。頭の中が真っ白で何も思い浮かばない。その時、少女の隣に背の高い男性が現れた。少女は男性の足にすがるように

「パパ！この子買って！」

と、その笑顔だけは崩さずに言った。男性は困ったような顔をしていたけど、お金を店主にそっと差し出した。少女は僕を抱きしめたまま、嬉しそうに店内を回り始めた。パパと呼ばれたその男性は、少女の嬉しそうな顔を見てまんざらでもなさそうだった。店主だけは、いつも他のおもちゃが売れていく時に見せる少し寂しそうな笑みを浮かべていたけど…。

「パパ！ありがとう！」

そう言って少女は店に入ってきた時と同じように勢いよく店の外に飛び出した。その瞬間、目の前には僕がずっと憧れ続けた外の世界が広がっている。たくさんの人、様々な形の建物の数々、見たことのない色。下には石の道、上には青い空が広がっていた。目に見える範囲じゃ足りなかった。もっと知りたいと思った。色々な外の世界の事を。胸が躍るようなこんな気持ちになるのは生まれて初めてだった。もっともっと知りたい。外の世界の事。

そしてそれを他でもない、僕を抱いているこの少女に教えてもらいたいそう思った。そんな僕の心を読んだかのように少女は言った。

「今日からあなたは私の友達よ！だから私があなたに色々な事を教えてあげるわね」少女は空に僕を掲げるように突き出して笑った。

「その前に友達なんだから、名前を決めなくちゃ！ん～そうね…」

少女は片方の手で口を押えて首をかしげて、考えるような仕草をした。そして、そうだわ！と叫んで僕を見て言った。

「ロム！あなたは今日からロムよ！」

名前を付けたことで何故か少女の方が嬉しそうに僕を抱いてくるくと回りだした。やがて、少女のパパが店の中から出てきて、少女の手を握り歩き出した。少女の腕に抱かれたまま目に入るもの全てに目を奪われていると、ほどなくしておもちゃ屋とは比べ物にならないほどに大きな屋敷が目の前に飛び込んできた。流石に動揺したけど、少女が

「ここが私たちの家よ！」

と言ってくれたことが何となくだけ嬉しかった。

それからの毎日は思い出すだけで楽しくなれるような日々だった。少女は僕に言った通り毎日たくさんの事を教えてくれた。

言葉は勿論、家の中にある様々な家具、大きな庭の色とりどりの花。僕は毎日、少女の言葉を聞き漏らすまいと必死に少女の口から次々とする真新しいことを記憶していた。

「トケイ」、「テーブル」、「マンネンヒツ」、「オサラ」、「チューリップ」、「パンジー」、「ベッド」。

「おはよう」、「こんにちは」、「さようなら」、「いただきます」、「いってきます」、「おやすみなさい」。

少女の放つ言葉が何を指しているのか一つも忘れないように、少女が寝た後にその日初めて聞いた言葉を頭の中で繰り返すのも楽しみの一つだった。「空」が「青い」のも「ペン」

で「書く」のも「椅子」に「座る」のも全て少女が教えてくれた。

僕は幸せだった。

その日、僕はあの子と家のベランダにいた。

あの子は、今日は「カメラ」を教えてあげる。そう言って僕をベランダの手すりに座らせた。

あの子は「カメラ」を構えて僕を撮ろうとしていた。その時、強い風が吹いたと思うと突然目の前からあの子が消えた。目の前には空が一面に広がっていた。何が起きたのか分からなかった。何で空が見えるんだろう。何で後ろから風が吹いているんだろう。何で。

そこまで考えたとき、僕の全身を強い衝撃が襲った。僕は空を見上げて倒れている。はるか上のベランダから覗いているあの子の顔は今まで見たことのない程悲しそうな顔をしていた。ふと、自分の左腕に目を向けた。ついさっきまでしっかりと付いていた左腕は綺麗に消え失せていた。僕は恐怖した。腕がないことにじゃない。こんな変わり果てた自分を見てあの子はどんな顔をするだろうと想像するとこわくて仕様がなかった。あの子は玄関の扉を開けてこっちに走り寄ってきた。あの子は僕の左腕が無いことに気付いたのか、表情を真っ青にして、庭を這うようにして左腕を探し始めた。あの子は日が暮れて夕方になるまで探し続けたけど、不思議なことに左腕は見つから

なかった。僕は不安で不安で仕方がなかった。こんな壊れてしまった僕の事をあの子はどう思っているんだろう。もしかして僕は捨てられてしまうのだろうか。食事の後、僕はあの子に抱かれて部屋に行った。あの子はベッドの上に座り、反対側に僕を座らせた。電気の付いていない暗い部屋を月光が優しく照らしていた。僕の目の前のあの子は未だに悲しそうな顔をして俯いていた。出来る事なら「笑って」とそう一言だけ言ってあげたかった。その時、あの子は僕を素早く抱きしめ、ポロポロと涙を零し始めた。涙は僕の背中に落ちて僕の薄い布の服に染み渡った。

「ごめんね…。ロム…ごめんね」

「今までよりももっともっと大切に作るから」

「だから私の事嫌いにならないでね…」

その言葉がどれだけ僕を救ってくれたかあの子は知らないだろう。どれだけ安心させてくれたかも知らないだろう。自分を責めるように途切れ途切れに出るあの子の一言一言を受け止めながら、僕はあの子の涙を一晩中受け続けた。

月明かりの下、僕は黒いガラクタの山々の間を縫うように歩いていた。フラヌスと別れてから今に至るまでに九体もの「おもちゃ」たちに出会った。人形やぬいぐるみなど姿は様々だったけど、皆同じような暗い影を落としたような佇まいをしていた。僕は全ての「おもちゃ」達に全く同じ質問をした。

「幸せだったことを覚えているかい？」

ここで長く過ごしていてもちゃんとした幸せを覚えている、そういう「おもちゃ」に会えれば何か分かるかも知れないと思ったからだ。でも、質問の答えは全員揃って「覚えていない」だった。全員話を聞くと元々の持ち主やその人達としたことは鮮明に覚えているようだった。しかし、何故かそれが幸せだったかどうかという部分だけがどうしても思い出せないと言う。フラヌスと全く同じだった。僕もいつかああなるのではないかと思うと気が気でなかった。というよりも僕も彼らとさほど変わらないのではないかとすら思えた。いつか捨てられる事は分かっているあの子と一緒にいたのに、あの子が居なくなった瞬間に幸せじゃないような気がするなんて、都合が良すぎはしないだろうか…。もしかしたら初めから幸せなんてどこにもなくて、彼らは月日と共にそのことを無意識に自覚しただけなんじゃないだろうか。

でも、僕の中に確かにあった幸せを幻だなんて思いたくない。でも、あの子が居ることで満たされていた幸せが無くなってしまった今、僕はあの子にどの様な感情を向ければいいのだろう。

分からない…。何も分からない…。

ふと気付くと、楕円形の様になった広場らしき所に出た。少し休憩しようと僕はガラクタ山の一つに腰を掛けた。幸せを見つけると言っても正直今のやり方であるのか、それすら分からなかった。僕の幸せはあの子がいたから始まった。言ってしまう

ばあの子に作ってもらった幸せ。僕はたくさんの事をあの子に教わったけど、幸せの見つけ方は教わらなかった。結局僕はあの子に教えてもらったことが全てなんだ。それ以外の事は全く分からない。

「情けないなあ…」

ふと、横を見るとガラクタ山の表面から一つ際立って飛び出した木片が目に入った。家具の足か何かの折れ目だろうか。先が鋭く尖っていて、他のガラクタの影で黒く塗り潰されたそれは、酷く禍々しく見えた。

「これで胸を貫いたら…楽になれないかな…」

僕はそう呟き、尖ったその木片の前に立った。

おもちゃがこれぐらいで死んだりするか分からないけど…その方がごちゃごちゃと考えなくて済むかもね…。

少しずつ木片の先端に歩み寄っていく僕の動きを止めたのは上から降るように聞こえてきた一つの声だった。

「おいおい！ 久し振りにおもしれえ奴が来たと思ったらまさかの自殺かよ！？」

上を見上げるとガラクタ山の頂上に誰かが立っていた。月と重なったその姿はまさに悪魔の様な姿をしていた。その影は勢いよくガラクタ山を飛び降りて僕の背後に着地した。振り向くとそこには頭から角、背中には翼、手にはフォーク状の槍を持った悪魔としか言えない姿の人形が立っていた。

「君は誰…？」

「俺か？俺はガルダだ。よろしくな」

ガルダと名乗ったその人形は何か雰囲気は他の今までの「おもちゃ」達と違う気がした。他の「おもちゃ」が全員持っていた、何も考えようとしない、何も楽しくなさそうな虚無感。それがガルダにはない。彼なら知っているだろうか…。自分の中を埋める方法を…。「お前の名前は何て言うんだ？」

「え？あ…ロム」

「ロム、か。いい名前じゃねえか」

「ガルダ…だったよね？一つ訊いても良いかな」

「いきなりだな。やっぱおもしれえよお前。他のスカスカ共とは大違いだ。良いぜ訊いてみろよ」

スカスカ共とはフラヌス達の事だろうか…。でも、僕は今日の前のガルダから何か聞き出したい気持ちでいっぱいだった。今までの「おもちゃ」とは違う。それだけで僕の意識が向くには十分な条件だった。

「君は幸せだった事を覚えているかい？」

すると、ガルダの顔に常に浮かんでいた薄ら笑いが消えた。

「それは持ち主がいた時の事を言ってんのか？」

急に口調が変わり、明らかに一変したガルダを前に僕は首を縦に振ることしか出来な

かった。

「ああ…覚えているぜ。鮮明にな。あの時の俺は本当に幸せだった」

予想通り、ガルダは他の「おもちゃ」達とは違った。ちゃんと幸せだったことを覚えている。でも、僕は素直に喜ぶことが出来なかった。僕の求めていた答えを言ってくれたガルダ本人が、台詞とは真逆の表情をしていたからだ。

「勘違いはするなよ？ロム…。俺はかつての幸せを覚えていると言っただけだ。今もそれにすがっていると聞いたわけじゃないぜ」

怒り…。ガルダの表情が表しているのはそこはかたない怒りだった。

「成程…。お前は他の奴等とは違うと思っていたが、自分を埋めていた幸せの代わりを探している訳か…。まあ、行動を起こしている分他の奴等よりはマシか。とは言っても、放っておいたらお前もあいつらの仲間入りだけどな」

そう言ってガルダはケケケッと笑った。その嘲笑は、本当に心の底から他の「おもちゃ」達を蔑んでいることを物語っていた。

「分かるぜ、ロム。お前の気持ち。お前は俺と同じだ。幸せを失った今、その幸せそのものだった元持ち主に何を思えばいいのか悩んでいるんだろ？なあ！？」

ガルダの言葉は不思議な圧力を持っていた。まるで脅されている気分になっていく。僕の思っていることが的確に当てられることで、尚更僕の心を抉っていく。

「教えてやるよロム。人はな…」

この先は聞いちゃいけない…。そう思った時には遅かった。

「怨むべきなんだよ」

僕は心を突き刺されたかのような錯覚に襲われた。

怨む…？僕があの子を…？そんな事出来るわけが…。

「ロム…お前も持ち主が大好きだっただろう？離れたくないと思っただろう？でも、あいつらは俺らを捨てたんだ。その意味位分かるよな？」

「でも…僕たちはいつか捨てられる。大切でもお別れしなきゃいけない時が来る…。だから…」

「本気で言ってるのか？だとしたらお前とんだ偽善者だな」

「…！」

「俺はな、ある人気ヒーロー番組に出てくるヒーローの宿敵、悪魔怪人ガルダの人形なんだ。俺の元持ち主はその番組が大好きでそのヒーローの人形を買った時に、悪役にはやっぱりガルダだ。そう言われて俺とそのヒーローはセットで買われたのさ。遊ぶときはいつも二体セットで…。俺とあいつは親友だった」

ガルダは持っていた槍を僕に突き付け、「だがな」続けた。

「やがて持ち主は大人になり、俺達を含め多くなりすぎたおもちゃ達を捨てる時が来た。ゴミ袋に入れられていくおもちゃたちを見ている事ほど気分悪いもんはなかったぜ。そして、ついに俺達を手にとった持ち主が捨てたのは俺一人だけだった。そうさ、忘れも

しねえよ…。あいつはヒーローの方だけを手に取ったままこう言った」

やっぱり捨てられないよ…。

そう…。僕はあの子にそう言ってもらいたかったのかも知れない。何故僕を捨ててしまったのか…結局…それはつまり…。

「もう分かるよな…？ロム。悪役は決してヒーローにはなれない。俺たちは持ち主の奴らにとって捨てられないと言ってもらえる大切な存在じゃなかったって事だ！人が俺達を捨てる理由なんざそれしか無えんだよ！」

「そ、そん…な…」

僕は目の前が真っ黒く塗り潰されたような気がした。あの子と出会って良いことがいっぱいに起きすぎて頭の中が真っ白になったあの感覚とは正反対の感覚だった。

「なあロム…。そんな一時の気まぐれの優しさが作り出した幸せにすがっていても何も良いことがないぞ？そんなものにすがって空っぽな他の連中と一緒にされたくないだろ？新しい自分を埋めてくれるものを見つけたいんだろ？だったら怨め！人を怨め！」

「や、やめ…」

いっそのこと逃げ出したいのに体が言うことを聞かない…。あの子に捨てられたことのショックの再発もそうだけど、何より目の前のガルダに僕は恐怖していた。同じ人形、ただの「おもちゃ」の筈なのに何故こんなに違うんだろう…。月に照らされて狂気の笑みを浮かべるガルダは本当の悪魔の様だった。緊張とショックで倒れそうになったその時、ガルダの纏わりつくような重苦しい声とは一転、何もかもを優しく包むような声が僕を支えてくれるかの様に聞こえてきた。

「やめなよガルダ。苦しそうだよその子」

声の方に目を向けるとガラクタ山の一つに誰かが座っている。

「ちっ…。起きてたのかよ、あんた」

ガルダは露骨に嫌そうな顔を見ると、クルッと背を向けて歩き出した。

「あんたは苦手だ。話したくもねえ…。じゃあな」

「僕はまた君と話したいけどなあ」

「こっちは嫌だっつってんだろ…」

ガルダは山と山の間の道に入っていくと、夜の闇に紛れてすぐ見えなくなってしまった。

「大丈夫かい？」

再度顔を上げて声の主を見ると、そこには腹から下に布きれをかけた水色のテディベアがガラクタ山にのんびりと腰を掛けていた。

少し落ち着いた後、僕は自分の経緯をテディベア話した。

「成程、そんなことがあったのか…。ごめんよ、すぐに助けてあげられなくて。ずっと寝ててさ、ついさっき起きたんだ」

テディベアは申し訳なさそうにポリポリと頭をかいた。

「と言うことはずっと君はここに居たの？」

「そうだよ。というよりここから動いた事がまず無いからね」

テディベアは腹から下に毛布の様にかけていた布きれを取った。

「…足が無いんだね…」

「そうだよ。君の左腕と一緒にさ。前の持ち主少しばかりやんちゃでね」

テディベアは優しく笑った。

このテディベアも違う…。とっさにそう思った。ガルダともまた違う、どこか温かい感覚。僕はほぼ反射的に訪ねていた。

「君も幸せだった頃を覚えているの？」

テディベアはフフッと笑って口を開いた。

「うん。覚えているよ。今でも思い出したら笑みがこぼれ程に幸せな思い出さ」

「じゃあ、君がそれを忘れないでいられるのは持ち主だった子を怨んでいるから？」

「ううん。違うよ。僕はガルダとは違う。持ち主だった人達を怨んだりしないよ。ただ、ガルダの考えも間違っっては居ないと思うよ。むしろ自分の信念を貫くことは大切なことだと僕は思う」

「信念…？」

「そうだよ。自分を自分で支えられるのは信念を持っている者だと思うな。誰に何を言われようと曲がらない自分だけの考え。それを持たない者は少しずつ自分の事が分からなくなってしまふんだ。ちょうど今の君みたいにね」

何を焦ったのだろう…。でも、僕の知らない何かを知っている、この目の前のテディベアにそう言われると自分の中の何かが我慢できなくなった。

「それじゃあ、どうやったらそれを見つけられるの！？そう言うからには君だってその信念を持っているんだろう！？教えてよ！お願いだよ！僕はこの幸せを忘れたくないんだ！その信念が自分の欠けてしまった部分を埋めてくれるなら教えてよ！僕は…フラヌス達みたいに空っぽにもなりたくないけど、捨てられたからってガルダみたいにあの子を怨むことも出来ない！僕にはもう…分からないよ」

僕の一方的な言葉を受け止めても、テディベアは優しく微笑んで僕を見ていた。

「成程。君は随分色々な事をその持ち主に教えてもらったみたいだね。その子に教わった事が膨大すぎて、分からないことにぶち当たった時には随分と脆い。でもね、僕の場合そんな大それたことじゃないんだよ」

「どういう…こと？」

テディベアは得意げに言った。

「簡単なことだよ。僕の場合、自分の中を埋めるものに代わりなんて使っていない。だって、こうしてここに居て君と話しているこの瞬間さえ僕にとっては限りない幸せなんだから」

テディベアの言っていることは僕には全く理解出来なかった。埋めていたものが無くなったから、その代わりを探していたのにそれが必要無いなんて一体どういう意味なん

だろう。ガルダの話の時よりも混乱する僕に対してテディベアは尚も話を進めていく。「例えば君がそうして悩んでるのは何故だい？ガルダ辺りなら真っ先に人のせいだと言うだろうね。でもね、考えてごらん？そうして君が悩むという行為が出来るのは何故だと思う？」

「……！」

「君が歩いているのも、話が出来るとも、苦しむ事が出来るのも全て持ち主の人達のおかげなんじゃないかな」

「今僕が出来ることは全てあの子のおかげ…」

「僕はね、その持ち主たちが教えてくれた事が僕たちをまだこうして生かしてくれているんじゃないかと思う。だから僕たちが生き続ける事が持ち主達への恩返しになると、僕は思ってるんだ」

「あの子への…恩返し…」

「だから強いて言うなら、僕の信念は持ち主達に教えてもらった事を今度は自分が生きるために役立つ、かな。勿論その人達への感謝も忘れずにね」

「感謝…」

「僕に言える事はそんなものかな。後は君次第だよ」

僕は自分の中が温かくなるようなそんな感覚がこみ上げてくるのを感じた。強い怨みへの恐怖も、さっきまでの疑問も全て綺麗に溶けていくような気がした。僕が生きることがあの子への恩返しになるなら…。僕はここで精一杯に生きる。そしてあの子が僕の中に残してくれたものを使って僕だけの新しい発見をしよう。でもそう思うと尚更一つだけどうしても僕の足を止めるものがある。

「どうして僕を捨てたんだろう…」

テディベアは何も言わなかった。これ以上は君の問題だとでも言うように…。

結局僕はあと一歩気持ちに踏ん切りがつかないまま、広場を後にした。それでも帰る場所がない僕の足は自然と最初のダンボールに向かっていった。僕はダンボールに入ってうずくまった。そうしていたら、ぼんやりとした記憶が僕の名に少しずつよみがえってきた。

「そうだ…。僕はあの時…」

それは僕がこの廃棄物置き場で目覚める少し前の記憶だった。

僕であの子が全く遊ばなくなってから、何回季節が巡り回っただろう…。夕暮れ頃だろうか。あの子が急に僕を手を取った。いきなりでよく分からなかったけど、久し振りのあの子の腕の中はとても心地よかった。でも、ふと見たあの子の顔は何時だか見せたとても悲しそうな顔をしていて、僕は不安な気持ちを隠せなくなった。あの子と一緒に車に乗った。車内でもあの子は僕を悲しそうな顔をして僕を抱きしめるから、僕の不安は一向に消えなかった。どうしようもなく怖くてたまらなくなった時、あの子の腕の

中から僕はダンボール箱の中に移されたとき僕は無意識のうちに深い眠りについた。臆病者の僕は最後にあの子が僕をどんな顔で見っていたのか、別れる時に何を言ったのか記憶に残さずに終わらせてしまった。あの子から目をそらしたことは一度だってなかったのに…。

あの子が僕の事をどう思っていようと、僕はあの子の言葉から学んだことを一つも無駄にしないで生きていこうと決めた。そうすることでかつての幸せを覚えていることも、新しい僕だけの幸せも見つけられる。そうあのティディベアは教えてくれた。だからせめて、いや、だからこそあの子が僕に向けていた気持ちが知りたい。ここまで来て我儘かもしれないけど、それを知って僕は初めて前に進める気がする。でも、そんな事は不可能だ。最後にあの子の言葉から最後まで目をそらさなければこんなことにはならなかったかも知れないのに…。

その時、最初は影になって見えなかった箱の奥が、傾いてきた月に照らされ、わずかに白いものが見えた。近寄ってみるとそれは紙だった。器用に折り畳まれたノートの切れ端の様な小さな紙片だった。開くとそこには小さな文字が書いてあった。

「これは…手紙？」

僕は食い入るようにあの子が書いたのであろう文字に目をやった。

『ロム…今までありがとう。私が悲しい時にいつも一緒に居てくれて。私の話を聞いてくれて。私と友達でいてくれて、ありがとう』

「シェリーより…」

そう…あの子の名前はシェリー…。僕にロムというかけがえのない名前をくれた、僕の友達…。僕は紙を握りしめ、ダンボールを飛び出して、思いっきり駆け出した。シェリーは僕を最後に友達と言ってくれた。僕の背中を押してくれた。僕はこれで前に進める。だから大切なことを教えてくれてありがとうって伝えたい。シェリーから貰った言葉に僕の気持ちを乗せて…。僕は広場の隅に座るティディベアの前に止まった。ティディベアは少し驚いていたようだけど、すぐに穏やかな笑顔に戻った。

「ありがとう！あの子は…シェリーは最後まで僕の事を友達だと思ってくれてたんだ。君のおかげでそれに気付く事が出来たありがとう」

「気付いたのは君だよ。僕は何もしてない。僕は自分の考えを君に聞いてもらった。それだけだよ」

「僕が前に進めるのはシェリーと君が居たから…だから真っ先に伝えたかったんだ、君に」

「そうか。君が満足しているんなら僕は何も言わないでおくよ」

ティディベアが本当に嬉しそうにしてくれている事が何より嬉しかった。シェリーは僕に手を差し伸べてくれた。僕も自分から手を差し伸べてみたい。そう思ったのと言葉が口から出たのはほぼ同時だった。

「僕と友達になってくれないかな」

テディベアは目を大きく見開いて心底驚いたという顔をした。

「僕なんかでいいのかい？」

これには何の躊躇もなく答える事が出来た。

「君じゃなきゃ駄目なんだ」

今度は、テディベアは恥ずかしそうに少し俯いた。あれだけ笑顔を崩さず落ち着いた雰囲気だったテディベアの落ち着いた表情を見るのは、少し面白かった。

「僕はロム。君の名前は？」

「名前？ そうだ僕って名前をもらったこと無いんだ」

「そうなの？ あ、そうだ。知ってるかい？ 友達同士は名前がなきゃいけないんだよ。だから僕がつけていいかい？」

「え、つけてくれるのかい？」

「うん」

僕は片手を口の所に持って行って首を傾げた。

「何だい？ そのポーズ」

「これは名前を考える時のポーズだよ」

「そんなのあるのかい？ 面白いね」

その時、シェリーと出会った時の空の色と隣のテディベアの水色が重なった。

「ソラ… そうだ！ ソラなんてどうかな？」

「ソラ… ソラ… 良いね、素敵な名前だ。ありがとう、ロム」

「どういたしまして、ソラ」

ソラの笑顔はシェリーの笑顔によく似ていた。眩しいぐらいにキラキラしていて、その笑顔を眺めているときが一番幸せに感じられるから。

次の朝、ソラは居なくなっていた。ソラをいつも守る様にそびえ立っていたガラクタ山も綺麗に消え失せていた。一週間に一回行われる回収作業が今回ソラの居た場所だったらしい。ソラはきっと分かっている何も言わなかったのだろう。分かっている、僕と友達になって一緒に笑ってくれたんだろう。

「強いなあ… ソラは」

僕はガラクタ山の一つに腰を掛けた。太陽に照らされるガラクタ山は、夜見た時よりも、とても弱弱しく見えた。その時、前に黒くて大きなシルエットが僕の前を覆った。

「よう、ロム」

「真っ黒な体、昼間は目立ちすぎるね」

「うるせえな、ほっとけ」

ガルダはソラが居た広場を眺めて言った。

「何だよあの熊、居なくなりやがったのか。あいつ位しかまともに話せる奴居なかったのにな～。まあ、煩い奴が居なくなってせいせいするけどな」

台詞に似合わずどこか寂しそうなガルダの顔はどこか子供の様な無垢さがあった。

「ガルダ、もしかしてソラと友達になりたかったんじゃないの？」

「は！？ば、馬鹿言ってんじゃねえよ」

慌てるガルダの姿が面白くて、僕は思わずお腹を抱えて笑ってしまった。

「お前、たった一晩しか経ってないのに随分変わったな。まるであの熊みただげ、全く」

「そうかな…そうだったらいいな」

見上げた空には綺麗な水色が広がっていた。この空を見る度に僕は思い出すだろう。僕自身が作り出す幸せの物語。その一歩目を踏み出したあの満月の夜の出来事を。

---

Copyright(C) Jikei Group. All Right Reserved.

当サイトに掲載されている全ての画像・文章の無断転載・転用を禁止します。